

1. まえがき

四国・紀伊半島沖の南海トラフ沿いでは、有史以来100～150年の間隔で巨大地震（南海道地震）が発生し、それに伴う津波により四国の太平洋沿岸域では甚大な被害を繰り返し受けている。また、1946年の昭和南海地震から既に52年が経過し、早ければ21世紀前半にも次の南海道地震が起きるとも予測されており、地震・津波に対する防災対策を行うことが急務と考えられる。

防災対策を行うには、次の南海道地震で引き起こされる津波の沿岸部への到達時間や津波高などを予測し、津波リスクを評価しておく必要がある。一般に、津波リスクの評価には数値計算が用いられるが、得られる計算値の妥当性を把握するためには、文献などによる過去の津波の記録や現地調査による津波高などの実測値が必要不可欠である。また、現状ではどこで、どのような規模の地震が発生するのかを事前に予測することができない以上、種々の波源域を考え、仮想的に津波を発生させて、四国沿岸域に襲撃する津波のリスクを考察しておくことは今後の津波対策を行う上で有効な方法と考えられる。

そこで、平成9年度から新たに発足した津波部会では、本年度の活動報告として、

- (1) 四国における歴史津波（1605年慶長、1707年宝永、1854年安政南海）の津波高の再検討
 - (2) 波源域モデルを用いた四国沿岸域における津波リスクの評価
 - (3) 断層モデルを用いた四国沿岸域における津波リスクの評価
- の3項目についてとりまとめを行い、以下に報告するものとする。